

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	12
瑪瑙集	24
紅玉集	26
俳誌交歓	27
3月号月評	28
恵贈俳誌拝見	30
恵贈句集拝見	32
特別作品「すべてに感謝Ⅱ」	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	37
Ⅱ	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
「ひこばえ」たちあげとメンバー募集	41
他誌転載	42
枇の国父の蒼天(12)	44
環本部句会報(第二回)	46
「堺まち歩き」吟行案内(23)	48

今月の一句

花菜漬夫の知らざる石重し 殿村菟絲子

昭和三十五年作

子育ての折に鍛えられたのか我が家でもそうであるが、主婦は案外力持ちであり相当の重さのものでも楽に持ち運び出来ると自負している。花菜漬の重石はそう重くはないが全く夫の知るところではない。花菜漬の豊潤な味と香り、花菜の明るさに支えられた軽みの効いた主婦ならではの佳句であり「夫の知らざる」と言いつつも不服は微塵も感じられない。

隆子

寒

雀

塩
路
隆
子

雪国に育ちて固執らくだシヤツ

凍てし沼抱き森閑神の杜

柚子姫を浮べたる湯に殿ごこち

針山に待針咲かせ縫始め

灰かぐら舞はせ体験火吹竹

寒蜆食べて盛運疑はず

おのがじし光となりて寒雀

三月号光耀抄

塩路 隆子選

初霞模糊と舟浮く壇の浦
日矢射せど湖へ届かず寒の入
餅搗を器械に任せ龍馬読む
柚子風呂に夫の鼻唄一番湯
にんげんの形状記憶年用意
蕪村絵の残る角屋や冬紅葉
七種粥さみどりの香を噴き上げて
ひと雫枯木に雨後のクリスタル
残心の凜と乙女の弓始
買初は一刀彫の獅子頭
聖菓切る先づ子の皿へチョコの家
全部うそ全部本当夢始
マント着て探偵気どりすまし顔
真似事のじぶ煮なれども加賀の味
添ふ人の亡くて望郷冬銀河

坂上 香菜
小澤 菜美
笠井 清佑
増田 一代
阪本 哲弘
山口キミコ
伊藤 憲子
伊東 和子
北尾 章郎
田下 宮子
鈴木 照子
森下 康子
石川かおり
大松 一枝
中川すみ子

ひとり身に白味噌仕立て雑煮椀
 かるたとる老の意地見せ小町札
 あら玉の伊勢の青潮真珠筏
 ゆるゆると波来る河口浮寝鳥
 白壁に影の交はる枯木立
 ゆずの香に囲まれ長湯妻の声
 糊きかすシェフの白帽初仕事
 終ひ天神和服に靴の女学生
 涙とはあたたかきもの冬薔薇
 バチカンへ想ひを馳せる聖夜かな
 風花を喰ふや未来の池の主
 独り住み大根おろし磨り過ぎる
 雪原を彷徨へるかに夕鴉
 鳩の群羽音残して飛び立ちぬ
 多羅葉に記す願ひや初詣
 通ずれば奥に奥ある蓮根掘
 生き死にを神に委ねて初詣
 世界地図広げ旅恋ふ置炬燵
 つくばねを添へたる淑気刺身皿
 デート気分の夫と買出し年用意

西垣 順子
 新実 貞子
 小林 成子
 坂根 宏子
 笹井 康夫
 日山 輝喜
 藤見佳楠子
 竹内 悦子
 安本 恵子
 宮田 香
 常田 創
 杉本 綾
 宇治 重郎
 難波 篤直
 長濱 順子
 中本 吉信
 西田 史郎
 能勢 栄子
 高谷 栄一
 土井くみこ

駅伝の襷鮮やか冬の街
 白山の風に弾める寒雀
 初明り五感に点る抱負かな
 虎落笛人影なきに父祖の声
 煩惱を拭ひ切れざり除夜の鐘
 芹摘んでひと種の粥七日かな
 窓越しに残る枯葉のシルエツト
 初詣眼光の鋭き竹の虎
 根上りの松に柏手初明り
 火縄銃に栄えし町や実千両
 居酒屋で友と語らむ外は雪
 旅はるか迎ふ聖夜の灯のぬくみ
 獅子舞に噛まれて楽し京の宿
 神域の一樹一樹に雪の景
 のっぺい汁作れば母とつながれり
 とんど果て山黒々と暮れにけり
 冬ざれば人恋しくて逢いたくて
 留守守る漢ふたりの葉喰
 美しき笛賜りぬ夢始
 新年の顔して会釈交はしけり

桂 敦子
 片岡久美子
 川崎 利子
 小西 和子
 小林 久子
 駒井 のぶ
 青山 正英
 飯田美千子
 五十嵐 勉
 井口 淳子
 池田加寿子
 伊藤 洋子
 宇治原弥幸
 大島みよし
 岡 佳代子
 落合 晃
 山崎 里美
 山本 孝夫
 吉田 希望
 和田 郁子

泣き虫の星があとから聖夜劇
 梟の声の間遠や風の夜
 初夢の家庭教師は広目天
 金星を生み給ひけり寒の月
 団欒の締めは完食河豚雑炊
 雪の比良に真向かつてをり深呼吸
 招かざる冬將軍が玻璃叩く
 念入りの節の馳走や初座敷
 元旦の味ふるさとの雑煮かな
 五つ玉はじく算盤歳の市
 餅つきに杵臼不用器械音
 旧こよみあと一枚にありがとう
 遠き日の冬の匂ひや片想ひ
 三人でスキーきようそうがんばった
 お正月くろまめたくさんたべました
 ねんがじょうなんまいくるかたのしみだ
 お正月「大ふごう」してお金もち
 ろうばいのかおりただようお庭かな
 キラキラと樹氷で成長モンスタ―

和田森早苗
 吉田 晴子
 前川ユキ子
 松岡 和子
 松田 和子
 三川美代子
 宮崎左智子
 藤本 秀機
 宮越 久子
 福本スミ子
 出所 昌代
 北田 敏子
 岡村 圭子
 森下ちさと
 土井ほのか
 廣瀬まさや
 塩路 彩奈
 廣瀬 結麻
 高野 綸

琥珀集

獅子舞の笛

小澤 菜美

日矢射せど湖へ届かず寒の入
獅子舞の一座来る頃比良晴るる
父祖よりの獅子舞の笛遠ざかる
風花や京かまんぎ釜座に釜師の居（大西清右衛門）
雪をんな金箔残る弥陀を訪ひ
若狭より鱈売り媪金曜日
待春の五百羅漢やみな笑まひ

初太鼓

坂上 香菜

煤逃の老若男女海豚シヨ
初霞模糊と舟浮く壇の浦
玄海の風をまともに初詣（宗像大社）
尊氏の鎧の藍や淑気満ち
宗像の風颯々と鴨の陣
打初の大鼓のひびき小倉城
早打ちの佳境に入りし初太鼓（小倉太鼓）

龍馬読む

笠井 清佑

餅搗を器械に任せ龍馬読む
松過ぎて参道の砂利静まれる
初晴や巫女の振る鈴華やかに
互例会卒寿の人へ御慶かな
元旦の結び昆布の太さかな
なら町の低き廂に初雀
福袋を提げて腕白初笑顔

柚子風呂

増円 一代

冬うらら

山口キミコ

山荘に隠れ鳴きせる夕笹子

初日の出変貌したる故郷に

柚子風呂に夫の鼻唄一番湯

マフラーをお洒落に巻きて神戸っ子

梅園の梅ちらほらと陽を集め

雨上がり朝日の庭の寒雀

夕陽受け手を振る叔母の冬日影

年用意

阪本 哲弘

祝 箸

伊藤 憲子

欠航の張り紙叩く雲しまき

幾度も襟掴まるる枯木山

にんげんの形状記憶年用意

着ぶくれてレディーに譲る昇降機

子と対座せむとて閉める白障子

マニキュアに抓まれ海鼠縮みをり

初暦まだ見ぬ月日推し量り

冬うらら 杵を極めし角屋の間(角屋花街五句)

蕪村絵の残る角屋や冬紅葉

幕末の志士密談の冬障子

手入よき京島原の臥龍松

饗しの角屋の贅や年の暮

葱を買ふ無人販売棚田道

一品は冬至南瓜の小鉢かな

家族の名ひかる墨跡祝箸

恙なきひととせ願ふ初日かな

賀状来る逢はず忘れず半世紀

神前のたき火を囲み神酒祝ぐ

七種粥さみどりの香を噴き上げて

春隣小川のひびく糺森

茅葺の日射まるやか柿すだれ

山眠る

絵画展見し昂りの冬茜
里人に交じり足湯の冬至かな
母と子の折る色紙や掘炬燵
相合はぬ日は黙しをり冬木立
ひと雫枯木に雨後のクリスタル
峡の邑抱きてまろき山眠る
川涸れて底一面の風晒し

伊東 和子

獅子頭

田下 宮子

春を待つ姫の調度の化粧筥
買初は一刀彫の獅子頭
破魔矢受け神楽とどろく戦神
わだつみへ御酒を注ぎて漁始
いささかの岩海苔搔けり島暮し
引潮の岩場に海苔を搔く蟻
機音に窓を窺ふ雪女

弓 始

北尾 章郎

チヨコの家

鈴木 照子

雨戸引く夕べや終る冬ひと日
借老の恙無かりし除夜の鐘
葱その他盛られ整然鍋用意
オブジェ調崩れ枯蓮どん詰り
残心の凜と乙女の弓始
留守番の三味の手遊び寒の梅
終大師の大安売りやこれも慈悲

ハート絵を添へて招かれ聖夜劇
聖菓切る先づ子の皿へチヨコの家
プラレール繋ぐ聖夜の三世代
初鏡女の厄をとうに越え
グアムよりビキニ母子の初メール
寅年の明けて山寺風吠ゆる
寒風に色奪はれし落暉かな

手毬唄

森下 康子

煤逃げで賑はふゴルフ練習場
鏡餅出来上々と悦に入る
身の丈に見合ふ幸せ初参り
初富士や明日の吾が身と思ひたく
数へては七で詰まりし手毬唄
少年の匂ひほつほつお年玉
全部うそ全部本当夢始

探偵気どり

石川かおり

毛筆の文字堂々と賀状来る
祖の墓に家族の揃ふ二日かな
マント着て探偵気どりますまし顔
初出勤の同じ顔ふれ三輛目
遅れ来る快速電車雪のせて
人波に夫とはぐれし初戎
成人日晴着ひき立つみどり髪

霜の花

大松 一枝

芳ひに夫の好みの鱒大根
枯尾花立ちすがたの風情かな
ほのぼのと句集読む夜の掘炬燵
真似事のじぶ煮なれども加賀の味
冬の芽を天にいざなふ日差かな
凜として霜の声きく夜明前
朝日得て屋根まだらなり霜の花

冬銀河

中川すみ子

添ふ人の亡くて望郷冬銀河
コンクリを張られ淋しや冬の川
この階が終の住処よ蜜柑剥く
通販で済ます独りの年用意
目を病める犬の散歩や雪しぐれ
遠伊吹山の初冠雪の眩しかり
初霜を滑らぬやうに戸板橋

雑煮椀

西垣 順子

自己流に赤蕪刻み箸休め

ひとり身に白味噌仕立て雑煮椀

ひとり鍋寒きを飛ばす具沢山

羽子板は今年の顔の遠と真央

北国の人驚かす大寒波

柚子風呂に身体沈めて悲なき

竹の葉をさらさら滑る粉雪かな

小町札

新実 貞子

かるたとる老の意地見せ小町札

暖冬のメタボ果実や四等分

里山の纏ふ薄衣雪化粧

肅々と「万歳」一節初稽古

丹精の大振りりんご信濃産

生葉に弛む六脇や凍つる夜

ガラス拭き南天の赤極みけり

あら玉の年

小林 成子

先づは月読の宮へと初明り（伊勢四句）

あら玉の伊勢の青潮真珠筏

宇治橋を破魔矢と木の香つれ戻る

初詣赤福餅を賜れる

青丹よし墨の香匂ふ寒造り

餅花や庫裡の大釜湯気上げて

大佛の柱くぐりや初参り

浮寝鳥

坂根 宏子

木枯しやクレーン軋む造船所

ゆるゆると波来る河口浮寝鳥

明智越え柚子成る里を遠望し

保津峡に隠れ道あり時雨来る

落葉踏む幽けきリズム栗鼠走る

山峡の旧き駅舎や冬紅葉

冬ざるる峡の鉄橋人まばら

枯木立

笹井 康夫

寒牡丹

日山 輝喜

初東風や騎手どうどうと馬宥め

初明りふたり暮しの雨戸開け

老のみのともしびふたつクリスマス

柚子湯してこのひととせを顧りみる

白壁に影の交はる枯木立

蹲に風紋残す初こほり

風呂吹き香に咽びをり峽住まひ

自分史

塩路 五郎

虎土鈴

藤見佳楠子

元旦の鶏鳴を聞く静寂かな

湯煙に差し込む朝日淑気満ち

寒夕焼飛び立つ鳥を見失ふ

自分史を長引かすのみ濁り酒

七種粥いまさら邪気を払うても

奴胤我が物顔で空制す

新年会のカラオケ昭和遡り

ゆずの香に囲まれ長湯妻の声

ささやかがよろし二人のクリスマス

寒菊や癌挑戦の十箇条

命ある限り華あり寒牡丹

外泊許可に破顔の翁女正月

初詣虎堂々と信貴の寺

旬日の晴れの舞台や松飾り

三世代生きしをんなの千代の春

買物は振りて選べる虎土鈴

長考の一手定まり初碁会

人力車の心地よき揺れ恵方道

糊きかすシェフの白帽初仕事

小豆粥昭和の味をいとほしみ

藁被き凜と一輪寒牡丹

三月号月評

塩路 隆子

毎月「瓊」を謹呈している結社外の人達から「瓊は生き生きしていますね」とか「いい俳誌です」「見ている人は見ていますからがんばって」とかの声を聞くとは百倍の力を得た思いがする。創刊より会員一人ひとりに繋がりを感じての二年間であった。皆様の支えがなければ到底創刊することも続けることも叶わなかったと皆様に感謝している。今月は比較的新しい人に焦点をあてた月評にしたい。

真似事のじぶ煮なれども加賀の味 大松 一枝

治部煮は鴨肉に小麦をまぶし野菜と煮込み山葵を効かして食べる金沢の郷土料理の一つである。それを真似て作られたが、けっこうに加賀の味が出ていたという。訪れた加賀を懐かしく思い出しながら舌鼓を打たれたことであろう。

ひとり身に白味噌仕立て雑煮椀 西垣 順子

去年の秋にご子息が結婚され、今年は東京にて迎春をされた様子。京都にお住まいの作者は一人ながらも、きつちりと白味噌仕立てのお雑煮を作られてお祝いさ

れた様子。作者の几帳面な性格がそのまま表現されている。

鳩の群羽音残して飛び立ちぬ

難波 篤直

最近めきめきと実力を付けられた無口で実直な作者である。飛び立った鳩の群を目で追っていた作者の心に残ったのは、遠ざかるその姿とともに、残した羽音であったと言う。目を閉じた作者の心には何時までもその羽音が消えなかったことであろう。

多羅葉に記す願ひや初詣

長濱 順子

古代インドでは文書や手紙を書いたり、仏教の経文を書き写すのに多羅の葉をつかったようである。作者の訪れた寺で、古式にのつとつた多羅の葉に今年の願いを書く慣わしがあったようである。霊験あらたか一年の息災が保障されたであろう。

通ずれば奥に奥ある蓮根掘

中本 吉信

実際に蓮を掘った経験はないが、泥水の中での蓮掘作業は、ただ足の感触だけが頼りであろう。その骨を掴むまでが一苦労と聞いている。何事にも通じようとするれば奥に奥があり容易に奥義を極めることは難しいのが作者の感懐。難しい心象句であるが「蓮根掘」で